

# 医家による文集編纂の展開を探る： 江戸後期医学考証学派の事例から

成 高 雅\*

## Exploring the Development of Literary Collection Compilation by Physician Scholars: Cases from the School of Evidential Studies of Medicine in Late Edo Period

Gaoya CHENG

This research report examines the phenomenon of literary collection compilation by physician scholars in East Asia, focusing particularly on the School of Evidential Studies of Medicine in late Edo period Japan. While the compilation of literary collections by physician scholars was relatively rare in China, with limited examples such as Xue Xue (1681–1770) and He Qiwei (1774–1837), this practice became more prevalent in Edo period Japan. The study first provides an overview of physician scholars' literary compilations in China before examines the development of this practice in Edo Japan, where figures such as Gotō Konzan, Yoshimasu Tōdō, and members of the Taki family compiled their own collections. Special attention is given to the Taki family of the School of Evidential Studies of Medicine with particular focus on two important collections: Taki Motoyasu's *Rekiin Sōdō Bunshū* and Taki Mototsugu's *Ryūhan Bunkō*. Through bibliographical investigation of these texts, including the identification of extant manuscripts and their contents, this study reveals how physician scholars' literary collections served not merely as repositories of medical knowledge, but as important sources reflecting their broader intellectual activities and scholarly networks. The findings suggest that the compilation of literary collections by physician scholars represents a significant yet understudied aspect of East Asian medical and intellectual history, warranting further investigation into the ideological motivations and cultural contexts behind these compilations.

---

\* 立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員、京都大学大学院人間・環境学研究科人文学連携研究者  
gycheng@fc.ritsumei.ac.jp

キーワード：医家、文集、医学考証学派、多紀家、多紀元簡、多紀元胤

Keywords: physician scholars, literary collections, School of Evidential Studies of Medicine, Taki family, Taki Motoyasu, Taki Mototsugu

## I. 医家の文集編纂——その意義と研究視座

東アジア医学史研究において、医家による文集編纂という現象は、医学と文学、科学と人文学が交差する重要な研究領域でありながら、従来十分な注目を集めてこなかった。医家の文集は、単なる医学的知識の集成にとどまらず、医家たちの思想形成、学術ネットワーク、そして医学を超えた知的営為を解明する貴重な史料群である。特に日本の江戸時代では、医家による文集編纂が中国以上に活発に行われ、東アジア知識交流史の独特的な展開を示している。本研究報告は、従来看過されてきた医家の文集編纂という現象を通じて、東アジア医学史の新たな側面を明らかにすることを目指す。

文集とは、詩文を集成した書物を指す。中国の「四部分類」（経・史・子・集）において、文集は「集部」に分類される。これは複数の作者の作品を集めた総集と、個人の文章を集めた別集に大別される。一般的に文集には詩文・序跋・書簡・碑文・祭文・雜記などが収められ、編纂者の思想・学問的見解、社会的関係性を反映する重要な史料としての価値を持つ。

しかしながら、医家による文集編纂は特異な現象である。中国では医家の大多数が専業医者であり、文集編纂の例は限定的であった。これに対し、日本の江戸時代では医家による文集編纂が相対的に多く見られ、その内容は医学的論説を中心としながら詩文も含む独自の性格を示している。この日中の相違は、両国における医家の社会的位置づけ、医学と儒学の関係性、知識人文化の差異を反映しており、比較文化史的観点からも重要な研究対象と考えられる。筆者はこれまで、江戸時代後期の医学考証学派について研究を進め、特にその代表とされる多紀家を中心とした医学考証学派の成立と展開について、博士論文『医学考証学派の成立と展開：多紀家を中心に』（成，2025）をまとめた。この研究過程において、筆者は多紀家の文集編纂事例に着目し、医家による文集編纂という現象を探究するに至った。本研究報告では、まず中国における医家の文集編纂の状況を概観し、次に江戸時代日本における医家文集編纂の展開について検討する。その上で、江戸後期の医学考証学派、特に多紀家による文集編纂に焦点を当て、『櫟蔭草堂文集』と『柳渢文藁』の成立と内容を分析することで、医家による知的営為の一端を明らかにすることを試みる。

## II. 中国における医家の文集編纂

中国伝統社会において、医家の大多数は専業医者であり、文集編纂を行う事例は相対的に少なかったが、文人としての素養と医術を兼ね備えた者による詩文集の編纂が見られる。その代表例として、清・薛雪（1681–1770）は温病学派の大家として『湿熱条辨』を著す一方、葉燮（1627–1703）に詩を学び、『一瓢斎詩存』、『抱珠軒詩存』、『吾以吾鳴集』、『研桂山房詩存』などの自身の詩集を著した。これに加えて、彼は『唐人小律花雨集』などの唐人詩集を編纂し、『一瓢詩話』という詩論も残している。同様に詩集を編纂した例として、青浦何氏家族第二十三代伝人であり、『救迷良方』の輯録で知られる何其偉（書田）（1774–1837）が挙げられる。彼は『竹簾山人詩編』という詩

集を編纂している。特筆すべきは、薛雪と何其偉はともに科挙に応じたものの及第に至らなかった経験を持つ点である。一方、徐大椿（1693–1771）は『難經經釈』、『医学源流論』など多くの医書で名高い一方で、『回溪道情』という「道情」（通俗曲芸の一種）の集を著している。

一方で、医学に通じているが医を職業としない知識人もおり、例えば『妇科』という婦人科専著で知られる明末清初の文人傅山（1607–1684）は『霜紅龕集』を編纂しているが、本研究報告ではこれを伝統的知識人の学問的営為と考え、医家による文集編纂活動とは見なさない。

なお、陸懋修（1818–1886）が著した『世補齋医書』には文集16巻があり、彼の医学に関する論説と書簡をまとめてあるが、先述した詩文集と比べて、医学内容が主体を占め、医書としての性質がより強いものとなっている。このような「文集」は、我々が一般的に認識している集部の「文集」とは性質を異にし、むしろ医書が属する「子部」に分類すべきものと考えられる。

以上のように、中国における医家の文集編纂は、少数の事例ながらも確認される現象である。このような文集編纂の実践は特定の歴史的・社会的文脈において生じたものであり、彼らの知的営為を反映していると考えられる。

### III. 江戸時代における医家の文集編纂

中国から伝來した医学知識は、日本の文化的土壤の中で発展を遂げていった。特に江戸時代になると、医学界と儒学界の関係が緊密になり、儒学的素養を備えた医家が増加するとともに、医者と儒者の学問的交流も活発化した。こうした背景のもと、医家による文集編纂は中国よりも多く行われるようになり、その内容や形式においても独自の側面を持っている。

江戸時代の医家による文集は、後藤良山（1659–1733）『良山先生文集』（『良山後藤先生往復書簡』、『良山先生書簡』とも）、吉益東洞（1702–1773）『東洞先生文集』、吉益南涯（1750–1813）『南涯先生文集』、多紀元簡（1755–1810）『櫟蔭草堂文集』、多紀元胤（1789–1827）『柳渉文藁』、伊沢蘭軒（1777–1829）『蘭軒文草』などが確認されている。幕末期から明治には、山田業広（1808–1881）『椿庭文稿』、山田業精（1835–1902）『静斎文稿』、今村亮（1818–1891）『杏林余興』（36医家について詠んだ漢詩集）などが挙げられ、特に浅田宗伯（1815–1894）が多く著述を残したなかには、『鼓腹集』、『呉鳳集』、『杏林風月』、『栗園先生詩存』、『続栗園詩存』、『栗園文存』、『栗園余草』、『栗園余草詩』などの詩文集と考えられるものがある。彼が編纂した『皇朝医叢』には「文集」という分類が設けられており、これも諸医家の未刊行の文章が広く収録されたものである（渡辺ほか, 2015: 116頁）。

これら医家による文集編纂には、以下の特徴が見られる。第一に、医学的内容を主体とするものが多く、医学に関する論説、医学内容に関連する書簡、医学書の序跋文などが中心を占める。第二に、編纂は自編あるいは後人・弟子・門人によるものが多く、その多くは出版されることなく写本の形で伝わった。第三に、これらの文集編纂には、古方派あるいは医学考証学派の学統との関連性が見られる点が特筆される。

さらに、『本朝医家著述目録』によれば、これまでに挙げた以外にも多くの医家による文集・詩集と考えられるものが記録されている。例えば、富永正翼『逍遙樓文稿』、原良延『五岳人文集』、西川国華『逍遙樓文集』、『蓬蒿詩集』、小畑詩山『漫遊詩草』、岡部玄又『拙斎詩集』、岡澹斎『香橙窓集』などである。ただし、これらの文献の現存は確認できておらず、一次資料としての調査は

筆者の今後の課題として残されている。

#### IV. 医学考証学派と多紀家の文集編纂

江戸後期の医学界において、医学考証学派は重要な位置を占めていた。医学考証学派は、儒学における考証学の影響を受け、古典医籍の原典に立ち返り、文献学的手法を用いて学問を究明する一派である。医学考証学派の代表とされる多紀家は、日本最古の医書『医心方』を編纂した名医丹波康頼の後裔であり、多紀元孝（1695–1766）より、元惠（1732–1801）、元簡（1755–1810）、元胤（1789–1827）、元堅（1795–1857）に至るまで、代々幕府の医官を務めていた。多紀元孝が1765年に設立した私塾「躋壽館」は、寛政4年（1792）に幕府直轄の医学校「医学館」となり、多紀家はそこを拠点として医学考証学派の学問を発展させた。多紀家、とりわけ多紀元簡およびその二子、多紀元胤・多紀元堅は中国医書の研究に力を注ぎ、医書の収集・校訂・復刻などに尽力し、数多くの著作を残した。そのなかでも、多紀元簡の文集『櫟蔭草堂文集』と多紀元胤の文集『柳渉文藁』は、医学考証学派の学問的特質や、当時の知識人ネットワークにおける医家の位置づけを理解する上で貴重な資料となっている。

『櫟蔭草堂文集』は、多紀元堅が父の文章を整理・編纂した多紀元簡の個人文集である。文集の編纂は元簡の生前から計画されていたと考えられ、元簡の死後、元堅が本格的に編纂作業を進めた。元堅による『櫟蔭先生遺説』の序文には、当時すでに完成していた元簡の著述として『櫟蔭文集』5巻が挙げられている。同時期の書肆広告目録「江戸本石町十軒店万笈堂英平吉郎藏版医書目録」には『櫟蔭先生文集』が掲載されており、出版計画があったことがわかるが、実際には刊行されなかった。現存する『櫟蔭草堂文集』の写本は主に杏雨書屋本、京都大学富士川文庫岡氏本、同山田本、北里大学東洋医学総合研究所岡田文庫本の4種がある。筆者の調査の結果、杏雨書屋本が最終段階の完成稿であり、元堅が1837年に最終校正を施したことが確認されている。内容は全4巻構成で、卷一に序19篇、卷二に序23篇・引2篇、卷三に跋70篇、卷四に書6篇・論1篇・説1篇・医案4篇・記3篇・墓表3篇・銘2篇・贊6篇・詩8篇が収録されている。医学書の序跋文が多数を占めることから、元簡の広範な読書と目録学への深い関心、そして中国歴代の医書を歴史的・文献学的視点から体系的に把握しようとする姿勢がうかがえる。

『柳渉文藁』は多紀元胤自身が編纂した自らの文集である。現存する写本は、国立国会図書館本、京都大学富士川文庫本、早稲田大学本、東北大学狩野文庫本、内藤くすり博物館本、関西大学図書館長澤文庫本、杏雨書屋本、台湾故宮博物院本の8種が確認され、そのなかで台湾故宮博物院本は元胤による朱校・題記と元胤の子・元信による識語のある清稿本である。内容は全3巻で、卷上に序26篇、卷中に跋28篇、卷下に弁3篇・考7篇・医案4篇・書7篇・墓表3篇・詩13篇を収め、附録として「迂巣雜存」と題する文化9年（1812）の贊筆を収録している。『櫟蔭草堂文集』と同様に、多くの医書に関する序跋が含まれており、元胤の学術的関心と交流・交友を反映している。『柳渉文藁』の題名が示すように、この文集は草稿段階で、元胤の早世によって再編纂されずに至った可能性がある。元胤の子・元信の校訂を経て現在の形に整えられ、写本として伝わった。

別途、『国書総目録』に、多紀元堅自筆による『丹波元堅集』1冊が乾々斎文庫（武田薬品工業株式会社研究所付属図書館）に所蔵との記録がある。乾々斎文庫の所蔵資料は現在杏雨書屋もしくは慶應義塾大学図書館に移管されているはずだが、筆者は現時点での所在を確認することができない。

い。多紀家の関連資料の多くが散逸しており、『丹波元堅集』もその一つと思われる。書名から判断すれば文集と推測され、自筆写本の存在は元堅自身による編纂を示唆している。

医学考証学派の代表者である多紀元簡、元胤、おそらく元堅も文集を編纂したことは、医学考証学派の学術活動を理解する上で重要な意義を持っていると筆者は考えている。医を職業とする人の文集として、彼らの文集の内容は医学・医書に大きく関わり、「医案」という独立した分類すら設けられており、前述の書肆広告でも元簡の文集を「藏版医書目録」に収録していた。同時に、彼らの詩文も一部収められ、医者以外の面も垣間見える。

このように、医学考証学派の代表者である多紀家による文集編纂は、彼らの学術理念と密接に結びついた知的営為であったことが明らかとなった。『櫟蔭草堂文集』と『柳渉文藁』に収録された医書の序跋文の多さは、彼らが中国歴代の医書を収集・精読・考証する過程で、それぞれの書物の価値を見極め、文献学的考察を加えていたことを物語っている。これは医学考証学派の思想的基盤と学術的手法を如実に反映している。医学考証学派の文集は、医家による文集編纂の歴史的位相を探るうえで貴重な手がかりと考えられる。

## V. 今後の課題と展望

本研究報告では、医家の文集編纂について、特に江戸時代の医学考証学派を中心に考察してきた。このような医家の文集編纂活動は、当時の医者と知識人の交錯点を示す重要な現象として注目に値する。筆者が今後の研究において取り組みたいと考えているのは、以下のような問題である。

まず、医家による文集の全体的把握をさらに進めたい。本研究報告では江戸時代における医家文集の主要な事例を取り上げたが、『本朝医家著述目録』に記録されながら現存が確認できない文集が多数存在する。筆者は今後、これらの散逸した文献の所在調査や、写本・稿本の発見に力を注ぎたい。特に多紀元堅の『丹波元堅集』のように、『国書総目録』に記録が残るが現在所在不明の文集については、継続的な調査を展開する予定である。

次に、江戸時代における医家の文集編纂活動の分析をより深化させることを目指している。医家たちはなぜ文集を編纂しようとしたのか、そこにはどのような思想的影響があり、どのような理念が反映されているのか、そして実際に個々の文集はどのような方法で編纂されたのか、という点について、具体的な事例を通じて解明していきたい。特に医学考証学派に関連する文集編纂活動については、思想史的・医学史的分析を重点的に行う計画である。

さらに、筆者は今後の研究展望として、江戸時代における医学界と儒学界、さらに中国の学術発展との関係性を明らかにし、当時の知的文化の全体像を理解することを重要な目標として設定している。これらの研究を通じて、医家による文集編纂という視点から、東アジア医学史・思想史研究に新たな視点を提供できると考えている。同時に、文集研究という古典的研究分野に、医学史という新しい切り口を加えることで、学際的な研究の発展にも寄与したい。

## 参考文献

- 国書研究室編（1989-1991）『補訂版 国書総目録』岩波書店。  
 成高雅（2025）『医学考証学派の成立と展開：多紀家を中心に』京都大学博士学位論文（人間・環境学）。  
 孫之梅（2021）「尊唐尤在晚唐, 崇杜兼宗玉溪：薛雪『一瓢詩話』の詩學核心」『東嶽論叢』第10期, 31-40頁。

- 町泉寿郎（2022）『前近代の医家たちとその学び：日本近世医学史論考Ⅰ』『幕府医学館と考証医学：日本近世医学史論考Ⅱ』 武田科学振興財団。
- 真柳誠（1990）「浅田宗伯の著述とその所在」『漢方の臨床』37卷9号, 1055-1062頁。
- （2005）「臺灣訪書志Ⅰ 故宮博物院所蔵の医薬古典籍 雜著之屬1」『漢方の臨床』52卷7号, 1121-1126頁。
- （2006）「日本の医薬・博物著述年表（一～六）」『人文コミュニケーション学科論集』1・3・4・5・7・8号。
- 渡辺浩二・天野陽介・小曾戸洋・花輪壽彦（2015）「浅田宗伯編輯『皇朝医叢』について」『日本医史学雑誌』61卷1号, 116頁。

〈資料〉

- 板原七之助編輯（1935）『本朝医家著述目録』淺妻屋書店。
- 葉德輝撰・楊洪升點校・杜澤遜審定（2019）『郎園讀書志』上海古籍出版社, 543頁。